

賢い人

きみの罪を指摘し過ちを告げ
てくれる人に会ったならば、
その賢い人について行け。
隠された財宝のありかを
示してくれるような聡明な
人の言葉に従うように。

ブッダ：釈尊

「ダンマパダ」第六章 76

きみの罪咎を指摘し、過ちを告げてくれる人に会ったならば、その聡明な人について行け。隠された財宝のありかを告げてくれるような賢い人の言葉に付き従うように。

ゴータマ・シッタッタ（釈尊） / 「ダンマパダ」第6章（賢い人）76番

出典：『真理のことば、感興のことば』中村元訳

釈尊の生涯（概略）

- ・王子時代：小部族・釈迦族の王子として誕生。生後7日目に母が亡くなり、叔母に養育された。16歳で妃ヤショーダラを迎え、息子ラーフラをもうける。
- ・出家：城の外で老病死の現実に触れ、29歳で出家し沙門として修行に入る。師匠についたり、禅定や難行苦行を6～7年行ずるが、無意義を知って中止。
- ・成道：スジャータという娘が捧げた乳粥を飲み体力回復。ガヤー村の菩提樹の下で瞑想を重ね魔を退け、49日目の暁、35歳の12月8日に大悟された。
- ・初転法輪：梵天の勧請に応じて、人々に自らが悟った法を説く。ベナレス・サルナートの鹿野苑にてかつての苦行仲間の5人に初めて説法をされる。
- ・伝道：北インド各地を弟子たちと巡りながら法を説く。マガダ国のラージギル（王舎城）では、無量寿経、観無量寿経、法華経などが説かれ、コーサラ国舎衛城に隣接する祇園精舎は阿弥陀経が説かれたとされる。
- ・入滅：北へ向かう旅の途中、クシナガラで病が重くなり、沙羅双樹の間で、頭を北にして、最後の教えを説き（涅槃経）、80歳で入滅。2月15日とされる。

◆同じ経典「ダンマパダ」第18章(汚れ)には「他人の過ちは見やすく、自分の過失は見難い」「ひとのミスを荒探し、目くじら立てれば自分の煩惱がさらに汚れる」という偈もある。

耳の痛い言葉だが、つついそうしてしまう人間の性分は今も昔も変わらない。その根っこには、保身や見栄、できれば自分の暗部を見ずにやりすごしたいという涙ぐましいような自己防衛本能があるのだろう。

よって、どれだけ箴言・忠言に耳を傾けられるかは、その人の器が試される生涯通じた課題だ。特に目上の人が少ない年代や、組織内で役職が上がるほど、あるいは家長や親ともなったら、重々心がけねばならない。

いつも周りにイエスマンばかり、あるいは表面的な付き合いだけでは、ここぞというピンチなときに寂しい思いをするかもしれない。

自分自身の悪癖や、どんな罪業をつくっているかは、ふだんそこに無自覚なゆえに正しくくい。しかし対処次第では、知らぬうちにまってきた自分の固い殻が破られ、大きくつくりかえられる貴重な機会・素材(財宝)ともなりうる。

そのような他者の存在は、若かりうが身内であろうが、ライバルであろうがかけがえのない財産だ。私たちは知らぬうちに、本当はそういう出会いに遇ってきたのではないだろうか。

釈尊の周りにも、十大弟子をはじめ、同じ志を共有し教えを学び、戒律を守って悟りへの道を歩む出家集団＝僧伽(サンガ)や、各地方で経済的支援を行う在家信者たちが生まれた。

「仏・法・僧」を三宝として敬い(聖徳太子・十七条憲法)、帰依するのが仏教徒たる大前提。源信和尚は「宝の山に入りて手を空しくして帰ることなかれ」(往生要集)と説いた。

これでは本人のためにならない、余計な罪を作らせてしまう、という視点は自分の見方も広く深くしていこう。恨まれても言うべきことは言い、いったんは癩に触るが聞き入られるようでありたいものだ。(文責：報恩寺 林 暁)



図：東京大学仏教青年会「再考仏教伝来」から
インド北部
釈尊在世の歩み